

ここ江戸川区には 伝統的なお祭りがたくさん残っています。

お祭りは人を優しくする

幼い頃、遠く空からピーピャラと笛や太鼓の音が遠くから聞こえてくるとワクワクしたものでした。

子どもたちだけでなく、大人たちも普段より優しい顔になり、特におじいちゃんは張り切っていたものです。

早足でお祭りに駆けつけると、そこはいつもと違う世界。

いつも怖い顔で叱るおじさんも嬉しそうだし、いつもより何となくキレイな近所のお姉さんに声をかけられてドキドキ…。

いつもの見慣れた町が、キラキラと輝いて見えました。

ふるさとの想い出は、いつもお祭りの記憶とともにあります。



みんなのために

お祭りをを行うためには、地域の人々が利害を超えて心をひとつにして協力しなければなりません。お祭りが墓んな所は人のつながりが深いと言われるゆえんです。

ここ江戸川区には、今もお伝統的なお祭りがたくさん残っています。また、地域の方々に親しまれるようにするなど、新たな工夫を凝らしながら次世代に引き継ぐ努力をしている人々もいます。

区のスローガン「共生・協働」にもそんなスピリットが活きているようです。

人々の笑顔があふれる江戸川区のお祭りをご紹介します。

鹿島神社例大祭

マタギ建て行事

「江戸川区の歴史・文化・自然」

鹿島神社



【主会場】 鹿島神社

鹿骨4-9-17

【起源・由来】

鹿島神宮（茨城県鹿島市）の神鹿が春日大社（奈良市）へ向かう旅の途中で倒れ、村人たちが手厚く介抱し、その亡骸をねんごろに葬った（鹿見塚）。鹿骨という地名の由来ともなった。境内には神鹿の像が建てられている。

【特長】

前日にはマタギと呼ばれる木組みを建て、氏子代表が整列してこれをくぐり身を清めて参殿する。戦前までは浅間神社と同じように幟を上げていたが、戦後の混乱で継続が難しくなりやむなく中止。その旗竿で現在の神楽殿を造った。

【現在のすがた】

毎年9月20日直前の日曜日が例祭。4町会の神輿と子ども神輿も入れると12基もの神輿が出る。2006年に新調された鹿嶋神輿（1丁目町会）は、神鹿の伝説にならい、様々な彫刻で飾られている精緻な作りである。この神輿で鹿骨の郷土史が語られるほど。地域の誇りを次世代以降にも引き継がれていくことを願って作られている。

2010 3.21(日) ▶

6.13(日)

江戸川区の

第8回企画展示

江戸川博物館・シズカ美術館

祭り

その地をカタチ

撮影コーナー

ハッピを纏って
写真を撮ろう!!

ギャラリーイベント

お囃子演奏会と
和太鼓体験

(東西神楽保存会・島上北社)

4/26(月)

17:00 ~ 18:00 [無料]

申し込み

要

鹿毛神楽見学ツアー

(鹿毛神楽保存会)

5/22(土)

14:00 ~ 15:00 [無料]

[定員 30名(参加申し込み要)]

提灯

ちようちん

神社のイメージを 文字に込める

江戸文字、相模文字、寄席文字とご希望に合わせてどんな文字でも書きます。神社にもいろんな神社があり、そのイメージを文字で表現するのが私の仕事です。江戸川区内でも、北から南まで神社や町会の提灯をやらせてもらっています。



提灯とは昔の懐中電灯のようなもので、江戸時代以前は祭礼や儀式に使われ、しだいに庶民も照明器具として活用するようになりました。



The light
darkness is



生田目提灯店3代目
生田目政信さん

生田目提灯店 江戸川区東小岩6-1-4 電話:03-3658-0218

しめ縄 注連縄

たかがワラ、 されど神様の道具です

農家の副業として冬場、夜なべして作ったのが注連縄や注連飾りです。たかがワラ、されど神様に関わる道具です。自然と丁寧にワラを扱いながら、慎重に作ります。みどらずも刈った後、穂の青々とした色が保たれるよう天日干しするなど手をかけているんですよ。

神聖な場所を区別するための目印です。古代米の稲穂がつく前に刈り取られる青稲「みどらず」が材料。かつて江戸川区は都内有数の生産地でした。

注連縄のルーツ

『古事記』によると、天岩戸に引きこもったアマテラスオオミカミを神々が騒動し、やっとのことで岩戸から引っ張り出します。その時、オオミカミが再び引きこもらないよう、天岩戸に縄を張りめぐらせました。この縄が注連縄の起源といわれています。



メ飾り総合卸問屋 小宮商店3代目
小宮敏昭さん

はんてん 纏

使い込むほどに味わいが深まる

藍染めの半纏は褪め口がいいよね。使い込むほどに色が落ちて味わいが出る。以前は酒屋の前掛けや植木職人の半纏なんて注文もあったけど、今は祭り一本だね。神輿を担ぐ人の気持ちが高揚してくるような粋な半纏になるよう、気合を入れて作ってますよ。



半分の生地で手軽にできることから
半纏と名がついたとか。
江戸の花形である火酒が着用し、
祭りや職人の作業着として
着られるようになりました。

斎藤染色3代目
斎藤福次さん



八雲神社
亀井瑞雄 宮司

先祖の生活の 知恵ともいえる 行事です

笹だんごを神棚にあげておくときくかびるんだけど、このだんごと笹を煎じ熱を出した子どもに飲ませると不思議なことに熱が引いたんだね。迷信というかもしれないけど、先祖はこれで命をつないできたんです。八雲神社の笹だんごは、私の田んぼでできた米を使い、境内の笹で宮司の私が作っているんですよ。



八雲神社

天正様として鎮まれ、水路の神としても信仰されてきた八雲神社は、かつては目の前に江戸川が流れ、行き交う船は帆を降ろし、船路の安全を祈ったといわれます。



八雲神社氏子事務総長
田久保重和 さん



八雲神社氏子総代
米本寛 さん

笹だんごは習慣であり、
故郷の風景そのもの。

電気のない時代、闇夜を燈々と照らす満月の光の下で行なわれる笹だんご行事は、なんとも趣がある、楽しみでしたよ。翌日の例祭よりも宵宮の方が賑やかだね。演芸会も開かれて、黒山の人だかりの中でみんな大笑いしたよ。嫁に行った娘も、実家に帰ってきてね。笹だんごは信仰であり、習慣であり、心の隅に刻まれた故郷そのものなんだよね。



笹だんご行事

八雲神社



【主会場】 八雲神社

江戸川3-24-9

【起源・由来】

やくひよりま
疫病除け

はやつやま
江戸時代、流行病がはやったとき、笹だんごを食べたら治ったとの言い伝えから、旧暦6月の満月の夜、例祭の宵宮（前夜）に「満月の笹団子」という御神符ごしんぷが授けられたことが起源といわれる。最初は氏子が笹だんごを奉納していたものがいつの頃からか神社が御神符として授けるようになったという。

【特長】

おすまだい
笹の葉に小豆大の餅をつけた御神符は、宮司が境内の笹などを使い自ら作っている。この御神符とともに配ってくれる折詰のだんごが食べられるのは八雲神社ならでは。昭和期の俳人、石田波郷も1957（昭和32）年に八雲神社を訪れ、「笹団子梅雨の弱日のさしにけり」という句を残している。

【現在のすがた】

おひなまつ
今年は7月24日が宵宮の予定。かつてはスサノオノミコトミコトを祀る神社で広く行われていたが、今では区内ではここだけ、東京都内でも数社と言われる。



しほね みこし 鹿骨の歴史を物語る神輿が完成しました。

高瀬政夫さん

鹿島神社ではかつては幟を上げ、その行事がなくなった後は幟の柱で神楽殿を造り、長らくは山車ヤマクルマで祭りを行ってききました。祭りには町会の神輿ミコシが出るようになりましたが、鹿骨シホネ丁目町会の神輿はレンタルでね。いよいよ自前の神輿が欲しいと会を立ち上げました。地元の伝説をモチーフ

にした凝った神輿にしたいと依頼すると、神輿店も彫り師も、みんな熱くなってくれてね。損得なしで立派な神輿・鹿骨を造ってくれました。神輿造りも祭りも、町のみんなと一緒ににならないとできないこと。みんなで味わうその幸せは、一人では味わえない本当の幸せだと思います。

鹿見塚と鹿骨の由来



春日大社を造る時、鹿島神社から伝説を神輿に乗せ、奈良に運びました。その途中、くちくちとお祭の鹿を平人が手塚くちくちとされるのが鹿見塚。これが鹿骨という地名の由来といわれています。



タケミカツチの大神の国譲り



鹿島神社の祭神で、天や地の神であるタケミカツチ大神は、アマテラスオモミカミの御子により国譲りを申し入れ、その時、国譲りの様子が描かれています。



鹿島神社

鹿島村の鎮守。鹿見塚の伝説に由来し、タケミカツチ大神の立神とアマテラスオモミカミの御子三神を勧請し、一日を建て、鹿島神社と名づけたといわれています。

鹿づくしの神輿

鹿島の足元には鹿の四季が彫られています。



中代勝啓さん

